パウロの祈り　　めぐみ教会
2025年 1 月 19 日

開会賛美　 新聖歌 197番『祈りの園生を』
聖書箇所 エペ 1:15-19
1:15 こういうわけで、私は主イエスに対するあなたがたの信仰と、すべての聖徒に対する愛とを聞いて、 1:16 あなたがたのために絶えず感謝をささげ、あなたがたのことを覚えて祈っています。
1:17 どうか、私たちの主イエス・キリストの神、すなわち栄光の父が、神を知るための知恵と啓示の御霊を、あなたがたに与えてくださいますように。
1:18 また、あなたがたの心の目がはっきり見えるようになって、神の召しによって与えられる望みがどのようなものか、聖徒の受け継ぐものがどのように栄光に富んだものか、
1:19 また、神の全能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力がどのように偉大なものであるかを、あなたがたが知ることができますように。
導入
教会員のみなさん、久しぶりです。新来者のみなさん、5 年前まで牧師をしていました、清野と申します。よろしくお願いします。新年ですので、新年にふさわしい聖句を心に止めましょう。使徒パウロ先生の祈りです。
そっくりの祈りが、ピリピ書とコロサイ書の冒頭にありますので、これはパウロ先生が諸教会の信徒を覚えて祈った時の、いつもの祈りだったようです。すなわちこれは使徒パウロ先生が毎日めぐみ教会の聖徒たち、すなわちわたしたちのために祈ってくれた祈りと言えるでしょうね。すなわちこれが、神様が私たちに期待しておられることなのでしょう。祈りの内容を心に留めましょう。

まず挨拶です。
エペ 1:15 こういうわけで、私は主イエスに対するあなたがたの信仰と、すべての聖徒に対する愛とを聞いて、 1:16 あなたがたのために絶えず感謝をささげ、あなたがたのことを覚えて祈っています。
土浦めぐみ教会の聖徒たちの信仰と愛を知って、感謝して祈っています。ちょっとこそばゆいですが、うれしいですね。

最初の祈りは：
1， 1:17 どうか、私たちの主イエス・キリストの神、すなわち栄光の父が、神を知るための知恵と啓示の御霊を、あなたがたに与えてくださいますように。
めぐみ教会に集うみなさんが、万物の創造者、慈しみに満ちた、偉大な栄光の神

様をもっともっと良く知るように。それがパウロ先生の日常の祈りだったのです。主イエス様が約束してくださる、慈しみ深い父なる神を、もっともっと深く知ってほしいそうです。そこに進むために、八木重吉という日本人のクリスチャン詩人の詩を味わいながら瞑想していきたいのです。

八木重吉は、1898年に東京の町田市に生まれました。120年前の方です。東京高等師範学校（筑波大学の前身） 在学中にクリスチャンになりました。卒業して、神戸で英語教師になり結婚し1男1女をもうけます。その頃から詩を書き始めました。

召天後に、いくつかの詩集が出版されました。『貧しき信徒』『八木重吉詩集』『八木重吉信仰詩集、神を呼ぼう』等、筑摩書房等からです。 つい最近、こんな詩に出会いました。

イエスがそっと手を触れたら、水が酒になった。
そして婚礼の席がにぎやかになった。

盲人の目に手をつけ、キリストが開けと言ったら
すぐに目が癒ってしまった。

手がなえて動かせない人が、キリストにさわってもらい、
さあ癒ったよ、と言ってもらったら、
すぐに手がようく動くようになった。

聖書によると2000年前、見えなかった目が癒されました。萎えた手も、主イエスがふれると癒されたそうです。それから数えきれない人が、同様の不思議を体験して来ました。60年ぐらい昔にも、そのようなことが起こっていました。

一人の高校生でした。自分のダメさばかりが気になり、打ちひしがれていました。社会の汚さに嫌気も指していました。そして人間社会の汚い闇を見て、人間に失望しました。それゆえに、生きることの意味を見いだせず、人生の虚しさを感じておりました。しかし主イエス様がそっと手を触れたら、変わりました。イエス様がそっと手をふれたら、その人自身が変わりました。

その高校生徒は私のことです。確かに周りではなくわたしの中に変化が起こったのです。全てが変わったのではありません。でもわたしの内側の何かが変わったのです。それから私のキリスト者としての人生が始まりました。

この詩には、詩人の感動と神様への期待が表現されています。主イエス様に対する、幼子のような憧れと信頼があります。この憧れと信頼を持って、主イエスを見上げて進みたい。主イエス様にそっとふれていただき、静かな感謝と歌いたくなるような喜びを経験したい。今年、栄光の神様のすばらしさを期待して歩みましょう。

2, 次の祈りは:

1:18 また、あなたがたの心の目がはっきり見えるようになって、神の召しによって与えられる望みがどのようなものか、聖徒の受け継ぐものがどのように栄光に富んだものか、

パウロ先生は祈っているのです。みなさん、お 1 人びとりが、神様からどんなに素晴らしい約束と希望を与えられているかを知ってもらいたい。その約束と希望の一つは、常に傍らに伴ってくださる神でしょう。

八木重吉は、神戸から千葉県柏の中学校に転任します。しかし半年後に結核と診断されて、茅ヶ崎の病院に入院します。当時としては死の宣告に近いものでした。教師を退職して療養を始めましたが、詩を書き続けました。 身体は急激に弱り、すぐに絶対安静の状態になってしまいました。そして入院して1年半後の1927年10月に亡くなりました。わずか29歳と8か月でした。そんな身動きもできない状態の中で、記したしでしょうか。こんな詩が残っています。

つきとばされて宙にぶら下がり
キリストと二人ぎりになったと思ったことは無いか

『つきとばされて宙にぶら下がり』

この言葉を聞いて私の脳裏に浮かんだのは、吉川英治作「宮本武蔵」の一場面でした。 武蔵は哲学的剣豪ですが、青年時代には乱暴者で、村人に懲らしめられたことが在りました。捕まえられて金縛りに会って、高い木に吊るされてしまうのです。村人みんなに背を向けられて、誰も助けてはくれないのです。宙にぶら下がり、とは、そんな何もできない状態のことでしょうか。

人生、病で横たわる時でなくても、そんな時があるものです。それは納得できない理不尽な苦しみの中で眠れない時でしょう。仲間に裏切られ、打ちのめされて、人間に絶望した時でしょう。まるで忌み嫌うように, まわりが自分に背を向けている、と感じた時でしょう。軽々しい人間のことばを嫌い、誰にも会いたくなく閉じこもった時でしょう。まるで宙にぶら下げられて、たった一人、何も出来ない時でしょう。

そんな完全に孤独の時です。実はその時、詩人はそこにキリストがおられたことに気づいたのです。詩人はここで、キリストと二人きりになる至福は、信頼できる仲間に囲まれて、笑いがこぼれて来る時ではなく、つきとばされて宙にぶら下がった時だった、と回想するのです。全くの一人になった時に、何もできなかい時にこそ、私はキリストと二人きりだった、と言うのです。それが苦痛を忘れさせてくれるほどに至福の時だったのでしょう。詩人は「つきとばされて宙にぶら下がり キリストと二人ぎりになっ

たと思ったことは無いか」と、まるで仲間を探すかの如く問いかけたのです。

だとしたら、今年の日々の歩みの中で、たとえ突然突き飛ばされて宙ブラリンにされたと感じた時でも、そこから逃げることだけを考えないようにしましょう。逃げよう逃げようと慌てることなく、何とかしなければ、何とかしなければ、と必死に焦るよりも、すぐそばにおられる主イエスの声を聴きましょう。そして今年、キリストと二人きりという至福を味わいましょう。

3番目の祈りは：

1:19　また、神の全能の力の働きによって心の目がはっきり見えるようになって、神の召しによって与えられる望みがどのようなものか、聖徒の受け継ぐものがどのように栄光に富んだものか、あなたがたが知ることができますように。

さらに神を信じる者がどんな、信仰者の日常生活の中に、どんな偉大な力を与えられるかを知ってほしい、と祈っているそうです。神の召しによって与えられる望みがどのようなものか、 聖徒の受け継ぐものがどのように栄光に富んだものか、 神のすぐれた力がどのように偉大なものか、どんなに、どのような、と繰り返しています。神の恵みがどんなに大きくどんなに豊かで、どんなに素晴らしいものかを知ってほしい、パウロ先生は、すべてのクリスチャンに、その喜びにお奥底まで味わってほしいと思ったのでしょう。

では日常生活の中でどのように生きて神様の偉大な力を体験するために、何を目指して歩めば良いのでしょうか。あなたがたの心の目がはっきり見えるようになって、と在りましたが、神をただ見るだけでなく、神を凝視して、その御心までを見たいと言う、もう一つの詩を紹介しましょう。

神様、わたしのすべての力を、
あなたを見ると言う、一つの力に統べてください
あなたに感謝すると言う、一つの力に統べてください。

神様の麗しさを感じたい、さらにさらに神様に感謝したい、そのために廻りの雑音が聞こえないほどに集中したい、という祈りです。実は数千年間、人類はそうするように命じられてきたのですね。

申 6:4 聞きなさい。イスラエル。主は私たちの神。主はただひとりである。
6:5 心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。
6:6 私がきょう、あなたに命じるこれらのことばを、あなたの心に刻みなさい。

熱心に集中して、神の御声を聴き、心の奥底の想いをささやく。それを続けること

は、幼子のような主イエスへの憧れ、神様への信頼になるのでしょう。

『神をおもふ秋』

とにかくすすんでゆきたい　あゆんでゆきたい、
かぎりなく　澄んだこころ
かぎりなく　あたたかいこころをもとめて

『かぎりなく澄んだ心、かぎりなく暖かい心を求めて』 偽りやハッタリではなく、澄んだ心です。詩人の心の奥からの祈りでしょう。思い上がりや傲慢ではなく、真実で温かい心です。このように美しい日本語で語られると、私はまだこのような美しいものを得ていないことに気づくのです。それは私の内にはまだ宿っていないと感じます。なので、この年、主イエス様と二人きりで語り合い、日々ここに向かって歩もうと思うのです。

いつでも、電車の中でも、どこでも、台所でも学び舎でも、どんな状況になっても、讃美する時も、病で横たわるときも、まさに宙にぶら下げられたような苦境の中でも、可能なこと。それは主イエス様と二人ぎりになって語り合うことなんですね。最後に、多くのクリスチャンに愛されている、八木重吉のもう一つの詩を紹介します。

ゆきなれた路の、なつかしくて、耐えられぬように、
私の祈りのみちを造りたい。

祈りましょう

父なる神様、2000年前から祈られてきたことに驚きます。今あるはその積み重ねられた祈りの結果であることを感謝します。主イエスの起源2025年の歩みを始めました。今も祈られている如く、あなた様のご期待の如く、心の目がはっきり見えるようになって、あなた様の召しによって与えられる望みがどのようなものか、信仰者の受け継ぐものがどのように栄光に富んだものか、味わいたいのです。今年の歩みの中で、あなた様の恵みの奥行きを体験させてください。主イエス様のお名前によって祈ります。

応答賛美　聖歌594『なおもみ恵を』

祝祷　エペソ 1:19 神の全能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力がどのように偉大なものであるかを、あなたがたが知ることができますように。
主イエス　キリストの恵み、父なる神の慈しみ、聖霊なる神の親しい交わりが、豊かに限りなくありますように。